

特報部

FAX 03 (3595) 6911 Eメール tokuho@chunichi.co.jp

避難者いじめ実名で訴え

福島原発事故

東京電力福島第一原発事故では多くの子どもたちが故郷を追われ、転校先でいじめを受けたケースが少なくない。東京都内で避難生活を続ける高校二年鴨下全生さん(17)もその一人。いじめや避難生活の実態などを知ってもらおうと、自身の体験を実名で訴えている。

(石井紀代美)

「隠し事をして生きるのもつやめると決めた」。「こちら特報部」の取材に応じた鴨下さんは、決意に満ちた表情で語り始めた。

自宅は、同原発から南に約四十キロ離れた福島県いわき市。事故翌日の二〇一一年三月十二日に被ばくを避けるため両親と弟の家族四人で住み慣れた町を離れ、都内のアパートで暮らすようになった。当時八歳、小学三年になる直前だった。

転校してすぐ「福島から変なヤツが来た」といじめられた。「あいつの触った物に触ると手が腐る」とばい菌扱いされるのは日常茶飯事。図工の工作に悪口を書かれたり、太ももに鉛筆の先を刺されたりしたこともある。鴨下さん

高2 鴨下さん 隠し事に葛藤



「実名でいじめの実態などを伝えていく」と決意した鴨下全生さん。東京都千代田区で

の母は「学校に行く時間になると、頭や腹が痛くなつてうずくまっていた」と振り返る。

他にもつらいことがあった。自宅は避難指示区域外のため「自主避難」の扱い。「自主避難は国が存在を認めていないので、大人も子どもも差別を受けやすい。原発事故を矮小化しようとしている。

「福島」を隠すのは、自分の大部分を隠して生きることに。楽しかった幼い頃の思い出も、広い家が福島にあることも話せない。不安定で過酷な避難生活の実態も知ってほしい。「自分で決めたのに、

「心が砕けそうに…」



バチカンでローマ法王フランシスコ(右)と対面する鴨下さん(中央)。(C) Vatican Media提供・共同

ローマ法王との面会契機「理不尽な社会変えたい」

行事の招待状が届いた。今年三月、バチカンのサンピエトロ広場でローマ法王フランシスコと対面した鴨下さんは、英語でメッセージを読み上げた。「政府と東京電力は事故の責任を認めず、多くの福島の人々が傷つき、分断され、差別されています。どうか福島に来て、人々のために祈り、励ましてください」。法王は鴨下さんの肩に手を当て、深くうなずきながら耳を傾けたという。

それまで鴨下さんは講演会などに招かれ、匿名で体験を話すことがあった。ただ、名前を出さず、社会にどれだけの訴求力があるのか疑問にも感じてきた。「福島を隠さず、強く生きていかなければと思っていた。一步を踏み出すきっかけになった」

法王との対面をきっかけに実名で話すように変えるとメディアで取り上げられ、講演の依頼も増えた。鴨下さんは「自分の他にも、同じ悩みを抱える避難者はきつといる。いじめや原発など、理不尽なものを生み出す社会の仕組みを変えていきたい」と強調した。

LINEの追跡

る。出張のサラリーマン以

入れられな(う)ひんじ